

令和7年度 佐那河内小学校・中学校 学校評価アンケートについて

1 はじめに

本校では、「特色」と「魅力」ある小中一貫教育校として「英語教育」「ふるさと学習」「ICTを活用した教育」を三本柱とし、9年間を通してすべての児童生徒の可能性を最大限に伸ばすことをめざしています。

今年度の取組について、児童生徒、保護者及び教職員に対してアンケートを実施いたしました。（実施期間：1月19日から2月10日まで）本アンケートは、自らの教育活動その他の学校運営について、めざすべき目標を設定し、その達成状況や達成に向けた取組の適切さ等について評価することにより、学校として組織的・継続的な改善を図ることを目的としています。結果について、以下にまとめます。

2 小学校

<生活について>

児童アンケートでは、「自分から先生や友達にあいさつができています」と回答した児童の割合は約89%でした。自分から進んで行う習慣が付いてきており、児童会や生徒会の活動も一定の成果を収めています。保護者・教職員のアンケート結果でも、ともに約95%を超える高い肯定率を示しており、学校の方針が家庭にもよく浸透していることが分かります。一方、実生活を見ると、「相手の目を見て」「大きな声で」といった具体的な動作がまだ定着しておらず、改善点があります。

生活習慣については、以前から課題にあがっていた「早寝・早起きができている」の項目において肯定的な回答をした児童の割合が約70%で、昨年度と比べて17ポイント増加しました。少しずつ改善の兆しは見られますが、高学年になるにつれて、塾や習い事、ゲームやSNSなどの利用時間が増えていることが、睡眠時間を削る傾向が見られるため、引き続き家庭と連携し、生活リズムの改善に向けた啓発に努めます。

児童の自立や自己管理については、「忘れ物をしないように持ち物を用意したり、身の回りの整理整頓をしたりしている」の項目では、「とてもおもう」と回答した児童の割合は、約32%にとどまりました。健康管理や身の回りの整頓など、自分のことを自分で行う力の育成が必要であり、今後も家庭と連携し、望ましい生活習慣の定着を図ってまいります。

学校全体としては、「朝食を食べている」という項目で高い数字が出ていることや、SNS等のトラブルが少ないことは、評価できる点です。全体的に改善傾向にはありますが、望ましい生活習慣等について知識として知っているだけでなく、日々の行動として定着させるための取組を継続していきます。

<学習について>

児童アンケートでは、「授業はわかりやすく楽しい」「授業中、先生や友達の話をしっかり聞いている」「学校行事や校外へ出かけて体験する学習は楽しい」等の項目において肯定的な回答をした児童の割合が 87%以上あり、学習に対して前向きな姿勢が見受けられます。保護者アンケートにおいても学習面での取組に対する評価が高く、教職員による授業改善の工夫が児童の学習意欲向上に結びついていることがうかがえます。

一方、「授業で自分の考えを文章に書いたり、発表したりしている」と回答した児童の割合は約 80%で、昨年度と比べて4ポイント増加し改善傾向は見られるものの、思考力や表現力等の育成が課題として挙げられます。

また、保護者アンケートでは、「学校は授業や家庭学習において、1人1台端末等のICTを効果的に活用した教育活動に取り組んでいる」という項目において「あてはまらない」と回答した保護者の割合が約5%でした。児童のアンケートでも、「タブレットやスマホ等はルールを守って使っている」という項目において否定的な回答した児童の割合が約11%でした。今後は、タブレットを使用する際のルールを徹底しさらにICTを効果的に活用することにより、協働的な学びにおいて児童自らが考えを深め、他者に分かりやすく表現する機会を各教科の中で意図的に充実させていきます。

「進んで読書をしている」という項目においては、昨年度同様、肯定的な回答をしている割合が、児童は約80%、保護者は約95%と高い傾向にありました。「読書習慣の形成に取り組んでいる」と回答した教職員の割合も約96%と高かったです。学校では、引き続き読書推進に向けた取組を充実させたり、読書冊数調べや貸出カードのグレードアップにより読書意欲を喚起したりしたことにより、児童の学校図書館の活用や読書時間等が増えています。今後は、幅広いジャンルの本に触れさせるような取組をしていきます。

<情操教育等について>

児童アンケートの結果、多くの項目で肯定的な回答が増加傾向にありました。「友達のよいところを認めている」「友達をいじめたり仲間外れにしたりせず、誰とでも仲良くしている」の項目において肯定的な回答をした児童の割合が、それぞれ約92%、約96%で、昨年度同様、互いを認め合いながら学校生活を送る姿がうかがえます。特に、「自分にはよいところがある」と回答した児童の割合が約86%で、昨年度と比べて11ポイント増加しました。学級や学校全体で互いのよさや頑張り等を認め合う活動を行い、人権学習において家庭との連携を図ったことが、自尊感情の育成につながりました。

また、昨年度の課題であった「困っている友達に自分から声をかけ、助けている」という項目において肯定的な回答をした児童の割合が約90%で、昨年度と比べて6ポイント増加しました。道徳の学習の充実や各教科での体験的な活動を通じ、発達段階に応じた人権・生命尊重の取組を工夫してきた成果と考えられます。さらに、心情スケールやホワイトボード・ミーティング®を活用し思考を視覚化したことで、「友達の間違った行動に対

してははっきりと自分の思いを伝え、正しい行動ができる」という項目においても改善が見られました。児童が学びを行動化できていることが分かります。

保護者アンケートにおいても、「いじめ防止や人権・生命を尊重する態度の育成」「適切な相談対応や家庭との共通理解・連携」の項目で肯定的な回答が増加しました。学年だより等で人権学習についての取組を発信したり、道徳ノートを通じて保護者からのコメントをもらったりしたことが、人権教育への理解や啓発につながったと考えます。教職員間やSC、SSW等との情報共有に加え、家庭とも密な連携を図ることができました。一方で、ホームページによる情報発信については、学校の取組を十分に伝えきれていないという課題も見られました。今後は、学級通信や学年懇談等を通じて、ホームページのさらなる活用と周知に努めてまいります。

3 中学校

<生活について>

生徒アンケートでは、「学校のきまりやルールを守って行動している」「安全に気を付けて生活している」等、各項目においてそれぞれ肯定的な回答が多く、保護者も同様の結果となりました。しかし、「早寝・早起きができている」と回答した生徒の割合が約31%で、昨年度と比べて大きく減少していました。生活習慣が乱れている生徒が増えたことが考えられます。「早寝・早起き」は生活習慣の基礎となるものなので、引き続き、生活指導を行っていくとともに、家庭とも協力しながら、望ましい生活習慣の定着を図っていきます。また、「忘れ物をしないように準備し、整理整頓を心がけている」の項目で、否定的な回答した生徒の割合が約29%でした。「忘れ物をしない・身の回りの整理整頓をする」ことは、学習環境を整えるためにとっても大切なことです。今後は、生徒が自発的に整理整頓できるようになるための取組を行っていきます。

重点項目である「進んであいさつをする」については、肯定的な回答をした生徒の割合が約83%で、昨年に引き続き高い傾向にありました。今年度も生徒会が実施している「あいさつ運動」を継続するとともに、小学生も児童会のあいさつ運動に加え、積極的に参加する児童が増えたこともこの結果につながったと考えられます。来年度は、学校に来ている外部の方など、誰に対しても積極的にあいさつができ、さらに「相手の目を見て明るくあいさつをする」など目標をワンステップ上げ、これまで実施してきた取組や指導を継続することで、より素晴らしい学校をめざします。

<学習について>

生徒アンケートでは、「授業中、先生や友達の話をしっかり聞いている」と回答した生徒の割合が約90%で、学習規律が安定している様子が見えます。また、「進んで読書をしている」生徒の割合は約52%で、昨年度と比べると7ポイント増加し、改善が見られました。朝読書や学級文庫の活用が着実に成果を上げています。さらに、「授業がわ

かりやすく楽しい」と回答した生徒の割合は約 85%で、授業改善の成果が肯定的な評価につながりました。

一方、「授業で自分の考えを文章に書いたり、発表したりしている」「自分に合った学び方を考えながら、計画的に学習に取り組んでいる」という項目は 70%程度にとどまり、昨年度を下回る結果となりました。今後は、思考を整理し他者へ伝える力の育成や、自発的・自主的な学習態度の定着が課題といえます。

保護者アンケートでは、全項目で肯定的な回答が 80%を超える高い評価を得ました。しかし、「学校は、授業や家庭学習において、1人1台端末等のICTを効果的に活用した教育活動に取り組んでいる」という項目は約 80%で、昨年度と比べて 12 ポイント減少しました。今後は、個別最適な学びを推進するため、生成AIの活用を含めた、より効果的で先進的なICT教育の展開に取り組んでいきます。

<情操教育等について>

生徒アンケートでは、「友だちのよいところを認めている」と回答した生徒の割合が 100%に達しており、日頃から良好な人間関係が築かれている様子が見えます。「いじめや仲間はずしをせず、誰とでも仲良くしている」の項目でも、肯定的な回答をした生徒が約 98%であることから、日常的なトラブルを乗り越える過程で互いを認め合う姿勢が育まれていると推察されます。

一方、「自分にはよいところがある」と回答した生徒の割合が約 62%であり、自己肯定感や自尊感情の向上には依然として大きな課題が残ります。また、「困っている友達を助ける」「まちがった行動に対して自分の考えをはっきり伝える」といった実践的な行動については、どちらも否定的な回答をした生徒の割合が約 24%あり、消極的な姿勢を示しました。今後は、互いの良さを認め合う活動を継続するとともに、各教科の指導においても人権教育の視点を取り入れ、自他共に大切にすることを育んでいきます。

また、ホームページによる学校の情報発信については、肯定的な回答をした教職員の割合が約 95%である一方で、保護者の割合は約 68%にとどまり、ホームページの更新状況が十分に周知されていない現状が浮き彫りとなりました。今後は、学年通信へのQRコード掲載や会合での案内を通じて情報の入り口を広げ、行事だけでなく人権教育などの教育活動についても積極的に発信していく必要があります。これからも学校・家庭・地域が手を取り合い、情報共有の充実を図りながら、誰もが安心して学べる人権尊重の環境づくりに努めてまいります。

4 学校運営（小中合同）について

今年度は Well-being な学校づくりをめざし、その達成に向けて小中一貫教育の理念のもと、全教職員が 9 年間を見通した特色ある教育活動や学校行事、校務等に取り組みました。その結果、学校運営に関する項目では、開かれた学校づくりや家庭・地域等との連携、

組織的な取組等において、肯定的な回答が多く見られました。特に、「学校運営に教職員の意見が反映されている」という項目では、「よくあてはまる」と回答した教職員の割合が約77%で、昨年度と比べて41ポイント増加していました。ホワイトボード・ミーティング®を活用し、情報交換や課題解決を図ったことなども成果につながったと考えられます。

また、働き方改革を推進する中、「業務改善の推進が行われている」と回答した教職員の割合が約91%で、昨年度と比べて23ポイント増加していることが分かりました。「休暇は取りやすい」という項目等についても増加傾向が見られ、教職員が働きやすい職場環境づくりに努めている成果の現れだと感じます。しかし、保護者・地域への理解促進やゆとりのある勤務等の項目については、肯定的な回答は増えてはいるものの、昨年度同様に否定的な回答も見られました。

今年度は、授業準備や児童生徒の指導・支援、様々な教育活動の企画・運営等に加え、人権教育研究大会に向けた取組や準備等もあり、より時間や労力が必要だったかと思えます。しかし、「チーム佐那河内」で組織的に対応し工夫することで、風通しのよい働きやすい職場になってきていると感じます。次年度も教職員の意見を反映し、さらに業務改善や働き方改革等を推進したいと思います。

今後も、児童生徒はもちろん教職員が協働的に学び合うことにより、9年間を見通した教育活動を充実させ、家庭や地域とともに児童生徒を育てる学校運営をめざします。

5 学校関係者評価について

学校関係者評価を実施するに当たっては、保護者、地域住民、学識経験者、関係行政機関の職員等を委員とする学校運営協議会において、次のようなご意見をいただきました。

○ 学校運営と教育活動の評価

- ・児童生徒・保護者・教職員の立場による違いはあるものの、全体的に高く評価され、昨年度課題であった項目でも、多くの改善が見られた。
- ・特に、授業づくりや小中一貫教育の推進、特色ある教育に関する項目において評価が高いのは、9年間の系統的な英語教育、地域のよさを再確認したふるさと学習等、創意工夫を活かした取組が成果として表れている。
- ・1人1台端末等ICTの効果的な活用については、発達段階に応じて活用場面や方法を工夫するとともに、家庭でもルールを守って使えるように周知することが大切である。

○ 広報の課題と情報発信の工夫

- ・今年度はマチコミメールや学級懇談等を活用し、学校ホームページ等を紹介したこともあり、閲覧する保護者が増えつつある。一方で、まだ十分に伝わっていない面も見受けられた。

- ・進学に関する情報発信については、多様な学科を招いての高校説明会等の取組が生徒を通じて家庭へ共有できていない面も見られた。今後は、生徒・保護者ともに安心して進路選択ができるような取組を強化することが重要である。
 - ・学校の優れた取組を発信し、多くの方に理解してもらえるよう、今後も、広報や情報発信等を工夫したり、家庭内での対話を増やしたりすることが大切である。
- 家庭・保護者の関わり方
- ・「自分にはよいところがある」という項目では、中学生は比較的低い傾向にあった。思春期の生徒への関わりは難しいが、学校・家庭が連携し、命の尊さや存在価値を実感できるような温かい声かけを行い、粘り強く自尊感情の育成に努めることが大切である。
 - ・アンケート結果からは、昨年度同様、「早寝・早起き」等の項目において、児童生徒と保護者の意識に乖離が見られた。家庭における就寝時の児童生徒の様子等について、保護者が把握し、管理できるようにする必要がある。
 - ・今後も、学校と家庭との連携を強化するとともに、保護者自身も「自分事」として捉え、意識を変えて児童生徒と関わっていく姿勢が求められる。
- 教職員の働き方と環境改善
- ・働き方改革の推進により、少しずつではあるが教職員の多忙感の軽減や休暇を取りやすい雰囲気等が見られ、ゆとりをもった働き方が一定程度促進されていることに安堵した。
 - ・働き方改革の推進や学校・教師が担う業務において負担軽減が可能なもの等について、保護者への情報発信を強化し、共通理解や意識改革を図る必要がある。
 - ・令和8年4月には「佐那河内村立学校業務量管理・健康確保措置実施計画」を保護者や地域へ周知し、持続可能な教育環境を整えられるようにする。

6 おわりに

この評価結果及び皆様からいただきましたご意見を、次年度の学校運営につなげていきたいと考えています。今後とも、本校の教育活動に対しましてご支援・ご鞭撻をお願い申し上げます。